丹波焼と土

Tanba Ware and Soil
Key-words：Tanba Ware, Soil, Glaze

今西　公彦
Masahiko IMANISHI

「丹波で焼き物を焼いています.」そう言うと,「丹波焼ってどんな焼き物？」,「丹波ってよくわからない」等とよく言われる．丹波で作陶している自分にとって何とも悲しい話ではあるのだが,「これが丹波焼だ！というものはどれですか.」と聞かれた時に,「？，せやな，どれやろ.」と思わず考え込んでしまったのも事実である．

その曖昧なイメージの現状に直面したのは，30 歳を前に独立した時のことだった．その当時は，地元の焼き物である丹波焼とは距離を置き，何か自分らしいことをしたいと漠然と考えていたと思う．そんな折，自身の立ち位置を考えようとさまざまなギャラリーやお店を回って話をする中で,「丹波かぁ」とか,「備前じゃないの」等，全く相手にされない日々を過ごす中で，自分の実力のなさを痛切に感じるとともに，ショックだったのは，余りにも「丹波焼」の知名度が低いことであった．そこで，自身も地元の焼き物について知らない事が多すぎることに気付かされ，そこで初めて，丹波焼と向き合う事となった．

それまでの焼き物屋としてのベースであった京都での内弟子時代の五年間に学んだ土を掘って焼くということに多くの時間をさき，地元の美術館や，骨董店でも丹波焼を中心に見るようになっていった．そうすると，それまでの距離感がなかったかのようにどんどん丹波焼に惹かれていく自分に驚きながらも，心の底から楽しめていることに手応えを感じられた．また，地元で色々な方々にご協力いただき，土や歴史について学ばせていただけた事も大きかったと思う．古い時代の焼き物が好きだった事もあり，徳利や大壺に好みのものが多く，徐々にそういうものを焼いてみたいと思うようになっていった（図 1）.

実際に焼き始めると，丹波の奥深さを知ることとなり，ますます没頭していった.

まず，発掘等の資料が乏しいために解明できない点が多いという事もある.

江戸時代後期より作り始めたとされる白丹波という焼き物があり，これは胎土に白化粧を施し，灰釉を掛けるという所謂粉引という技法なのだが，これに使用していた土や，白化粧の原料となる土もどこでどのようにしていたのかわかっておらず，さらに焼いていた窯址も発見されていない．しかしながら，今現在も使用されている技法なので，そのオリジナルな技法の痕跡は残っているのではないかと思うのだが，解明されておらず，失われた技法となっている.

図 1　筆者作　丹波大壺，南北朝に見られる反口大壺を原型に江戸期の焼〆の灰被り作品をイメージして製作.

図 2　江戸時代後期 白丹波大徳利（白泥）

その当時使用されていた土は漉土と呼ばれる半磁土のような土で，その土で作られた徳利は軽く，白さも美しい焼き物である．原料だけではなく，技術としても轆轤で挽いた原型に半乾きの状態で白化粧と呼ばれる泥状の土を掛け，また暫く乾かした後に灰釉を掛けるのだが，現代においても当時のクオリティを出すのは至難の技である（図 2）.

筆者も，漉土を作り，地元産のカオリン系の白化粧を作り，徳利を挽いて作るが，当時作られていたような 30cm を超えるようなものは成功率が随分と下がる.

© 日本セラミックス協会

図 3　丹波原土，丹波の典型的な花崗岩の赤土．粘り気はあるが，可塑性に欠ける．採掘する場所によって，単味でも使用可能となる．

図 4　兵庫県三田産の木節粘土，粘り気も強く，可塑性があるため，図 3 の可塑性を補う．この単体で作品製作も可能．

図 5　筆者作　白丹波大徳利，江戸時代後期に多く見られる大徳利を原型とし，製作．胎土は兵庫県三田産の原土とのブレンドで漉土とし，兵庫県三田産のカオリンを施釉し，灰釉を掛けて登り窯にて焼成．

たとえ，生き残ったものを登り窯で焼成となっても，収縮率の違いで窯出し後，冷め割れと呼ばれる割れにより，結果，成功率はかなり低いものになってしまうのである．当時の陶工が，それを始めたきっかけは何だったのか，どうやってその技術を得たのかという事に興味を引かれている（**図 3〜図 5**）．

江戸期だけでも，一定の再現性が得られない技法や土の活かし方があり，当時の陶工がなぜそれを必要としたのかを探る過程を楽しみながら続けていく事によって，これが丹波焼だ！と言える物が増え，色々な方々とも共有できる価値感が生まれてくるように思う．

筆 者 紹 介

今西　公彦（いまにし　まさひこ）
［連絡先］〒 669-2135　兵庫県篠山市今田町上立杭 1-47